

ほっとけい会会報 奥信濃の旅特集

「ほっとけい会」のメンバーは、東日本大震災の被災地巡り(11年)、韓国(12年)に次いで、今年は涼風を求めて、深山幽谷の北信州・秋山郷への旅に。小回りのカーブが延々と続く碓氷峠などの難路を往き来し、400キロを走破した。信州の誇る「温泉力」を体感し、旬の山菜や川魚料理、それに地酒に心地よく酔った。胸に刻んだ忘れられない各々の思い出を綴った。



のよさの里・牧之の宿前で、そろい踏み

北信州の秘境に行く

「ほっとけい会」道中記

7月21日、東京駅新幹線ホームに原征、富田信吉のご両人と私(八幡)の社会部OBにフリーライターの久貝真澄さんの4人が集合。上りの長野新幹線でやってきた荻原莞二さんを加え、メンバー5人が高崎駅に集結した。

塩沢の知人宅などへ遊びに来たが、商店街や町並みに当時の面影は全くない。町の東側にある坂戸山(634メートル)へあつ、スカイツリーと同じ高さだ。頂上に名将、直江兼継の坂戸城跡が。疎開時、土地の悪童たちとワラビなどの山菜採りや青大将を捕まえてに何回も登った懐かしい山だ。

◇峠の酷道越え

塩沢から初日の目的地「秋山郷」への山道をたどる。十日町市を通過して津南町の先が国道405号、車1台が通るのがやつの狭さで、砂利道が多い。先に対向車に気づいたほうが、山道の所々に設けられた待避所に回避するのが当たり前。そのうえ、日光の「いろは坂」は大きく緩やかなカーブだが、ここはコチョコチョコと曲がりくねった小回りの道が続く。「これは国道じゃなくて酷道だね」の声が。

除けの雁木が連なり、牧之の生家跡をはじめ飲食店や民家が復元されている。なかには昔から知られる「塩沢つむぎ」の記念館や写真館、郵便局などが明治、大正当時のままに甦り、若者たちの目を引く。

終戦前、小学4年から2年余、隣の六日町に疎開し、

0キロ、沖繩縦断800キロを一人で運転しきった、わがグループの女神である。

◇イワナの刺身に地酒

難関突破の約2時間後、秋山郷へ到着。この山里は長野県の最北端、下水内郡栄村だ。一昨年3月、東日本大震災翌日、震度6の強震に襲われ、大きな被害が出た。山奥の秋山郷は温泉が止まったり断水、停電が何日か続いたという。

状態に400メートルの木造の渡り廊下でつながっている。分家の一つ「文五郎」が今夜の宿だ。格子戸を開けると、8畳に4畳半の和室に囲炉裏付きの広めのフロア。露天風呂でくつろぐ。白樺の林を背に鳥甲山(2038メートル)の峡谷が迫る。隣の苗場山と並ぶ日本二百名山で、8月末まで雪渓が残る絶景である。本家で供された夕食がない。都会ではまず口にできない刺身と姿焼きのイワナ。はじめて味わう山の幸に豚肉のシヤブシヤブと盛り沢山。加えて米と水が醸す地酒がうまい。酷暑を逃れて、はるばるやって来た山里の涼風が疲れを癒し、至福の一夜だった。(八幡 裕隆)



「牧之の宿」の鈴木牧之の坐像前で